

ほろ酔い詩歌紀行 — 『俳風柳多留』を読む

日 高 昭 二

(神奈川大学名誉教授)



江戸人の暮らしを知るには、川柳の世界を眺めてみるのも一興であろう。たとえば、江戸金龍山浅草寺のほとりに住まいした、呉陵軒可有（ごりょうけんあるべし）の編になる、明和二年（一七六五）刊の『俳風柳多留』もその一つである。冒頭のあたりには、次のような句が並んでいる。

かみなりをまねて腹掛やつとさせ
故郷へ廻る六部は気のよわり

いずれも、よく知られた句であろう。雷にお臍を取られるぞと、子を追いまわし、「やつと」のことで「腹掛」をさせた母親の姿が活写されている。そうした母の頼もしさから一転して、次に登場するのは気弱な男。「六部」

は六十六か所の霊場に法華経を納めて巡礼する修行者のことで、その修行者が廻る途中で故郷へ立ち寄ると言いだす。それは、気力が衰えた証拠だというのである。こうした女房と男の対比が、暮らしのなかの一齣としてあざやかに浮かび上がってくる。

そうした暮らしのなかに、人々の酒の風景もとらえられている。

鼻紙で手を拭く内儀酒もなり

「鼻紙」は「懷中紙」のこと。その紙で手を拭くのは、したたかな内儀の所作で、だから彼女が出す酒もなかなかいけるというのである。この前句は、

二箇国にたまつた用の渡りぞめ

という句で、橋の渡り初めを待ちかねた人々には随分用が溜っていたらしいという観察である。人が橋を渡ることと重ねて、用事を渡ると言ったものだが、その渡り初めの景色から、「鼻紙」の句は、祝儀の酒へ転じて、しかも内儀の出自（芸者か）を想像して付けたのである。この「鼻紙」では、「鼻紙を口に預けて手を洗ひ」の句もあって、素人の女ではないなまめかしい美人の姿も捉えられていた。何と粋な、いい女じゃないか、という人々の嘆声すら聞こえてくる。そうした女の風情に、酒の景色がからまつているというわけである。

『俳風柳多留』を読む楽しみは、一句の趣向もさることながら、句から句へ、見えぬ糸のつながりをたどること

にもある。いわゆる「句移り」というもので、前句を読み終えたところに残る余情を、次に来る句の情景や人物が新しい気色をもたらず。その変幻自在な趣向こそが、一巻の真骨頂である。

むかしから湯殿は智慧の出ぬ所

湯殿というところは、知恵をはたらかそうとしても、裸ではどうにもならない。それは昔からと相場が決まっている。新潮日本古典集成の校注者、宮田正信によれば、この「むかしから」には、ある故事が暗示されているという。たとえば、湯殿の中で殺害された伊豆修善寺における源義家などで、それを「むかしから」という短い一語に込めた趣向の妙を指摘していた。ここには、固有名は記されていないが、別の句には新田義貞や、曾我兄弟を生け捕った御所の五郎丸、そして平清盛が死んだとき治療に当った医師も登場するなど、句集には有名人が満載である。では、「むかしから」につづく付け

句はどうか。

神代にもだます工面は酒が入り

神代の時代から、人をだます工面には酒が必要であったと付ける。「むかしから」と「知恵の出ぬ」を受けて、「神代」すなわちスサノヲのやまたのおろち退治の神話を出したのである。

前回の狂歌師列伝で、「武士八十氏」の「今もつて酒はやまたのおろちなら出す肴もいまだ姫ぞや」を挙げておいたが、昔も今も酒と神話はなじみが深いものだったのである。

そうして、古来から変わらぬ酒の効用を言い立てたあとに、次の句が付けられる。

盃にはこりのたまる不徳心

だます工面の酒が、不徳心の酒へと移る。酒を助けに出された話には落とし穴がある。それを思案して、申し出を承諾しかねて黙ったままでいると、

時ばかりが過ぎて、注がれた盃にはほこりがたまっているというのである。その盃にたまったほこりは、たまった家賃となる。

跡月をやらねば路次もたたかれず

「跡月」はあとげつで、先月の家賃のこと。「やる」は支払うこと、「路次をたたく」は、夜遊びに時を忘れて、長屋の木戸の戸を叩くこと。しかし、木戸は閉まっていて、大家を叩き起こすほかはないが、家賃がまだなので、それも出来ない。何ともおかしい句移りの風景だが、ここにも夜遊び＝酒の景色が隠れているように。

「柳多留」とは、婚礼の祝儀に用いる「柳樽」のことで、川柳と俳諧とを妹背の仲になぞらえて、その仲をとるもつめでたさに因んで書名としたものという。書名自体に、酒と縁があったのである。

御世代りの桜



宮地 智子

(詩人)

東京といっても、ここ文京区目白台あたりは、地下鉄が開通するまでは陸の孤島と呼ばれていたらしい。

目白通りを挟んだ斜め向かいには、今は亡き元首相の田中角栄氏の邸宅があり、神田川沿いに南東へ少し下ったところには椿山荘がある。ここはもとは、明治の元勳山懸有朋の屋敷であった。このあたりは関口台地と呼ばれ、昔から椿が自生する景勝地であり、すぐ隣りには関口芭蕉庵がある。松尾芭蕉が二度目の江戸入りの後、一六七七年から三年間、神田上水改修工事に携わった際に住んでいたといわれる住居跡である。

この地に新しく建てられた十階建てのマンションの一室を購入して僅か一年足らずで、インドネシアに赴任する

ため家を空けることになった次女が日本を離れると、今度は、アメリカに住んでいた長女一家が日本に戻ってきた。同じ区内弥生町にある古い五階建てのマンションの一室が四人家族の住処である。

こちらは弥生式土器の出土した場所として知られている。

わが夫は、あの東日本大震災で被害を受けた福島第一原発の近く、避難区域内にある精神病院の院長として多忙のために、埼玉県にあるわが家に帰宅することがめつたにない。

息子は結婚し、二人の子をもうけ、アパート暮らしである。夫婦共働きのため、孫たちの世話などは、息子の妻のお母さんが協力して下さっているから私に用はないのであり、従って私は

今、東京都文京区目白台にあるマンションの六階の一室に寝泊まりをして、弥生町にあるマンションの五階の一室に通っている。

目白台も弥生町も坂の多い町であり、どちらも生活するのに意外と不便な場所である。コンビニエンスストアは至る所にあってもそこには孫たちに食べさせる新鮮な肉も魚も野菜もないのが決定的な難点なのがかなしい。

それでも弥生町には近くに根津神社があり境内を通って近道をすれば十五分くらいの所にスーパーマーケットがあるので、まあまあ食料品が手に入る。筍の出回る季節になるとリュックサックを背負って買い出しに出かけるのは自分が食べたいから。

お茶と海苔だけは個人商店に立ち寄るのもまた、自分のためである。

その店には不忍通りに面した小さな茶舗で、両隣りは傘屋と不動産屋。店前には季節の盆栽などが台の上に置かれてあって、曇りガラスの格子戸をガラリと開けると、着物姿の白髪まじりの

お婆さんがにこやかに迎えてくれる。奥の方では息子さんらしい中年の男性がお茶を淹れているのが見えて、必ず、そのお婆さんが茶托に載せた煎茶を出してくれる。茶碗は京焼きのような華やいだ趣きがある。

私は腰かけてゆつくりと味わい、「ご馳走さまでした。」と丁寧に礼をして会計をすませて店を出る。さすがにお茶は苦味が出ないよう、うまく塩梅あんばいしてあっておいしい。何より、あの臍うろたけた商店主のあの笑顔が何ともいえず私の心を和ませてくれる。

「日曜日も開けております。そうしませんが売り上げに影響いたしますから。」とはほ笑む。「…の稽古所」という看板がかかっているの聞いてみると、孫息子が三味線を教えているといつて、歌舞伎役者の海老蔵と一緒に舞台に立った時の写真を見せてくれた。「大正十二年の生まれでございいます。」私の問いに晴れやかに答えてくれた。

九十歳をすぎて現役で働くお婆さん

の、あのしなやかさを見ると七十と少しの私など、まだまだ青いなあーと思わずため息が漏れるのである。

もうひとり、美しい商店主がいる。

目白通りに面した郵便局や古書店や宅配ピザ屋などと並んだ小さな文房具店。

そこではありとあらゆる文房具が店前にまで溢れていて、日曜日でも切手は買える、ファクスも使える。何より笑顔で迎え、「ありがとうございました。」と送り出してくれる白髪まじりの女店主の晴れやかさが嬉しい。

七月の東京のお盆はあつという間に過ぎてしまう。そのお盆の頃、奥の方から焙烙ほろろくに麻幹おがらを載せて、腰の曲つたお年寄りが、その息子らしい男性に支えられながら出てきたことがある。先代の店主だったらしいそのお年寄りは店の前で迎え火を焚き始めた。何代にも渡って受け継がれてきたのであろうこの店の歴史にも思いを馳せると、臍うろたけた、という形容にふさわしい人生の積み重ねが作り上げたこの女店主の美しい顔の懐かしさがよく理解される

のだ。

少し前には老夫婦で営んでいた豆腐屋がとうとう店を閉じた。時代が変わりつつあるのだ。十二歳になった孫娘は、おばあちゃんが作った食事にそっぽをむいてコンビニで買った何やかやをおいしそうに食べている。

春休みのある日、孫たちが待つ家に行きがてら、神田川沿いに列をなした花見客に混じって歩いた。川の両岸に爛漫と咲き誇る花も群れなす人も混然一体となつて華やいで見える。

やがて足並が乱れ、あちこちでスマートフォンや大きめのタブレットを覗き込む姿がみられ、私も隣りの人の画面を借りて顔を寄せると、官房長官の掲げる「令和」の文字が浮かび上がる。ため息のような喚声があがる。

平成三十一年四月一日。ひと月後の五月一日には新天皇が即位され、新しい令和の年が始まる。花あかりのなかで寿いだこの瞬間を私は忘れることがないと思う。

源大夫の説話、そして香川県と北海道の縁

志村有弘
(相模女子大学名誉教授)

西野金陵株式会社の多度津工場とい

う名を目にすることに、私は、平安時代の説話集『今昔物語集』巻第十九の源大夫説話を想起する。説話の題を平仮名混じりの文で記すと、「讃岐の国の多度郡の五位、法を聞きて即ち出家せる語」である。「法」とは仏の教えのこと。

昔、讃岐の国(香川県)の多度の郡に殺生ばかりをしている源大夫という男がいた。狩猟の帰り、僧から西の国に阿弥陀仏という仏がいて、その仏は自分(仏)を求めれば、願うこと全てが叶う世界(極楽)へ連れて行ってくれる、と聞いた。源大夫はその場で頭を剃って僧の姿となり、首から金鼓を下げ、それを叩き、「阿弥陀仏や、おーいおーい」と叫びながら、阿弥陀仏がいるという西の方へ向かって歩み

進んでいった。

高い山があれば真つ直ぐに登り、川があれば深・浅など考えず、西の方へ、西の方へと歩み進んで行った。途中、山寺の僧に、「目印として草を結びながら行くので、七日経ったら、自分を見に来てほしい」と頼んだ。

七日後、僧が尋ねて行くと、源大夫は「ここから海に入ろうとも思ったが、仏が返事をなさるので、名を呼んでいた」と言う。僧は不思議に思い、「どのようにお応えになる？」と訊くと、源大夫は「阿弥陀仏や、おーい、おーい、どこにおいでになる」と叫ぶ。すると海の中から「ここにいる」という、「微妙」(「みみょう」と読む。すばらしい、美しいの意)な声がした。僧は源大夫から「七日後に来て、私を見届けてほしい」と頼まれ、

七日後に行つてみると、源大夫は今度は死んでおり、口からは一葉の蓮の花が咲き出ていた。——これが『今昔物語集』の源大夫説話のあらすじである。

生き物を殺し、人の首を切ったり手足を折らぬ日は少なかったというのだから、確かに『今昔物語集』が記しているように、「悪く、奇異き悪人」(悪く、あきれるほどの悪人)である。とはいえ、狩猟をするのは生きるため。人の手足を折ったり首を切ったりしたというのは、古代に生きた源大夫が、他郷の人たちと領地を守るなどの争いをしたことを示しているのであろう。だが、どうであれ、仏教説話集である『今昔物語集』の立場からすると、殺生は悪。こうして源大夫の話は(悪人)の物語として造形・誇張され語り伝えられていった。

説話の中に、西へ向かって出立しようとする源大夫に郎党（家来）たちがどこまでもついて行こうとする光景がある。彼等は権力で屈伏させられている様子ではない。心から源大夫を慕っているらしい。源大夫の「大夫」とは五位のことで、源氏の姓を名乗る五位の位を持つ人である。都におれば清涼殿に昇ることができる殿上人。源大夫は、讃岐に住み、中央政府と何らかの繋がりを持っており、おそらく教養・品格共に備わった、立派な人物であったに相違ない。

ともあれ、讃岐の国の〈悪人〉と怖れられていた男が、ひたぶるに仏を求めた結果、口に蓮の花を咲かせるという瑞相を示した。蓮は極楽世界に咲く花。つまり、悪人であるはずの源大夫は極楽世界に生まれかわることができたのだ。この話は、人々の共感を得たらしく、多くの書物に書き記されることになる。『今昔物語集』の源大夫説話に取材したのが、芥川龍之介の戯曲「往生絵巻」（国粹、大正十年

四月）。『今昔物語集』は僧に刀を突きつけて、自分の頭を剃らせるなど、源大夫の激しく、異常な出家の描写が際立つ。対して、芥川の作品は、源大夫の異常な出家の場を描写の対象としなかったため、さほど感動が伝わってこない。悪人といわれていた男が激しい姿で出家し、そうして極楽世界に生まれかわる。ここに源大夫説話の感動の理由がある。余談であるが、往生とは、弥陀往生（阿弥陀仏のいる国に往生する）願望の立場で言えば、死を脱却して、極楽世界へ往き、そこに生まれかわることである。昔は、極楽に生まれることなどあり得ることではなく、大半の人が地獄へ墮ちると考えられていた。江戸期の累ヶ淵の怪談で有名な『死霊解脱物語聞書』に、村人たちが、悪霊となっている累（るい・かさね）に自分の親がどこに生まれかわったかを訊く場面がある。累は村人の親のほとんどが地獄に墮ちたことを語る。

香川・多度津関連の話を少々。私の

祖先は白石藩に仕えていたが、私は北海道の深川という町に生まれた。深川の隣り町・妹背牛にある西明寺は、山上明願が明治二十八年、香川県の安原村から屯田兵として渡道し、後に秩父別の善性寺の開基赤松淳性の指導を受けて開いた寺である。善性寺は、赤松俊（「原爆の図」の画家・丸木俊子）が生まれた寺。俊の父は祖父母と共に香川県の多度津から出て納内（現在の深川市納内）で過ごし、後に赤松家の養子となり、その寺の娘と結婚して俊が生まれた。このあたり、私などには、香川と北海道との縁が感じられ、感慨深いものがある。



妖精

佐川 毅彦



夕飯の食材と借りたビデオDVDを返すので家をでた。

木曜日は旧作一本七十円で借りられる。返して、借りるを毎週くり返している。多くて五本、たいていは三本ぐらい借りている。DVDケースのパッケージやキャッチフレーズにだまされて、いつも腹の立つくらゐらん映画を何本も見えてしまっている。だったら、借りなければ良いのだが、病気なのだ。木曜日になると体が勝手に動きだして、気づいたらビデオ店の中で棚のDVDを物色している。さらに最近は三十分ぐらい見ているうちに、あれ！ しまった、この前借りたヤツではないかと気づき、ものすごい大損害にあった気になる。三回、同じ作品を借りてしまった事もあった。それでもやはり又、ビデオ店に通ってしまっている。

今日はスーパーで買い物があるの
で、ビデオ店の表のボックスの中に
借りたDVDを放り込んで帰りに寄
ることにして、スーパーへ向かつ
た。坂道を昇ると、古風な沖繩らし
い大きな平家がバァーンと現われ
る。そこは十字路になっていて、右
方へ降りるとその先に小学校がある
はずである。

そこからランドセルの女の子がニ
コニコ歩いてくる。私に笑顔で「コ
ンニチワ」といった。私も挨拶を返
す。えッ！ なにこの子、びっくり
するほど、とても可愛い。夢か幻
か、なんて可愛いんだらう、現実
なのか、妖精か。なんか呆然と見惚
れて固まっている私の前をその子は
歩いてゆく。私は後姿が見えなくな
るまで立ちつくしていた。なにかし
ら、とても幸せな気分になってきた。
私は「ありがとう」と声にして、
スーパーの方へ歩き始める。



マルチプルアーチ式堰堤

豊稔池堰堤

「ほうねんいけえんてい」

豊かな自然が残る観音寺市大野原町に、中世ヨーロッパの古城のごとき風格を持つダムがある。日本唯一の石積み式マルチプルアーチダム「豊稔池堰堤」である。5つのアーチが連なる美しい姿がSNSなどを通じて知られるようになり、全国から見物客が訪れるほどの人気になった。昭和4年竣工の現在90歳だが、今日も下流の500ヘクタールの田畑に水を提供している。



国の重要文化財にも指定されている。



力強く水をたたえ続けるダムには
農民の想いが込められている。

豊稔池堰堤（通称：豊稔池ダム）の工事が始まったのは大正15年。当時、水不足に悩まされ、苦しい生活を強いられていた農民からの声を受けて着工が決まったのだ。特筆すべきは、その工事に下流の農民延べ15万人が関わったこと。工事の統制がしつかりとれており、3年8カ月におよぶ工事期間の間、無事故で死者も出なかったという。まだ大型重機のない時代に、まさに農民一人ひとりの想いを積み重ねて造られたダムなのである。

現在の豊稔池ダムは観光スポットでもある。その最大の見どころは、5つのアーチが連なる美しいデザインであろ。う。迫力のある下からの眺め、静かに水をたたえる上からの眺め、それぞれに魅力がある。また、放流の姿も力



強い。溜まった水が貯水量を超えるると自然放流する仕組みも備えており、先人の知恵に驚かされるばかりだ。毎年7月下旬～8月上旬には「ゆる抜き」と言われる大規模な放流が行われる。夏を告げる風物詩として人気で、多くの人が訪れている。

人為的な操作なく自然に放流される。



平成18年、国の重要文化財に指定されている。



五穀豊穡を表す稲や麦、鳥などのモチーフがあしらわれた豊稔池碑。

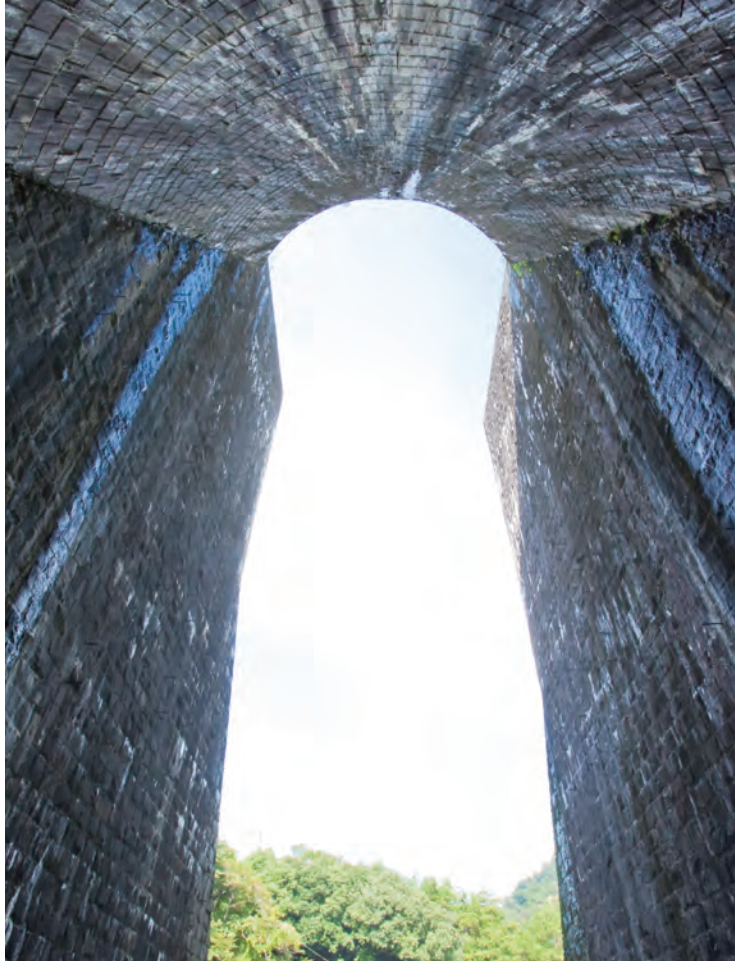


徳善久人さん
元丸亀高校教頭。五郷地区公民館長を勤める傍ら、豊稔池ダムと地元の魅力発信を続けている。



豊稔池のダムカード

《平日》豊稔池土地改良区事務所(観音寺市大野原支所向かい)、《休日・祝日》観音寺市大野原支所で1人1枚もらえます。



折々の魅力がある癒やしのダム。

地元出身の徳善久人さんは、「豊稔池ダムファン倶楽部」を立ちあげて、その魅力を発信している。幼い頃は「ダムがあるのが当たり前」と感じていたそうだが、定年退職前に豊稔池に関する講座に参加したことをきっかけに重要性に気づいたそう。現在はSNSなどに写真や動画をアップしたり、地元のボランティアガイドを行っている。徳善さんにとって豊稔池ダムは「毎日景色の違う癒やしのダム」。移りゆく木々の彩りや鳥たちの姿と一緒にダムの景色を眺めると、心が癒やされるという。

におい桜

中西美子



日本人は、ピンクの花を見れば、直ぐ何とか桜と名付けます。芝桜に、アツツ桜、桜草、コスモスに至っては秋桜と書いてコスモスと読ませる。どんだけ好きなんでしょう。秋になり桜のことも忘れた頃アツサムにおい桜が店頭に並びます。以前は、珍しい花でしたが、最近では、大量に売り出されています。時期的に敬老の日を送る一押しの花になったのでしょうかね。

アツサムにおい桜は、真ん丸のつぼみ、開くと肉厚の丸みのある花びらで、花が房のようにまるくまとまってつくので、桜に似ています。とても可愛い花です。そしてピンク色なわけですから人気者になるのは、必然的です。におい桜というくらいですから香りもかなりあります。薔薇や百合とは違い少し青臭いように思います。よく言えば薔薇や百合が成人女性か熟女なら少女のような香りですかね。

花言葉は、淑やかとか優美とか清純な心となっています。原産地は、インドアツサム地方、ネパール、中国、ヒマラヤに分布している多年草の短日植物です。寒いのは、苦手なようです。一九七六年頃、日本にきたアツサムにおい桜は、今では、ポピュラーな可愛い花として私たちを癒してくれています。

他人が良く見えて来ないうちは…

志村 栄 至

(評論家)



昨今の特異なニュースを望見していると、人間には幼児、子供の頃の経過の仕方が大事らしいとつくづく思ってしまう。誰もがその年代の影響下にあるのではと。

世の中は刻々、進歩しつつあってありがたいのだが、人間に関する認識に於いてもそう言えるかと言えば、言葉に詰まる。

早速だが、或る月刊誌はかつて、『没後十年・小林秀雄』とした号で、『批評という行為』と題して、当時の識者の対談を掲載したが、そこに実に面白い話が飛び交っているの、それをまず借用したいと思う。

「小林さんに、『美を求める心』というエッセイがあったでしょう。一輪の

莖を見るという話。そして莖だと自らが意識したら、もうその莖は見えてないということを言っておられる。」

そのエッセイが見つからないので、詳細は承知しないが、小林の本意とはまったくの別事が話題の中心に來ている。今回、これを借りるのは、小林という先人にこの時代の人にもっと関心を持っていただきたいという思いからで、曲解の事例を紹介することも、逆説的ではあるが意味があるかと信じてのことだ。対談はその先で、ここへ行き着く。

「意識すると見えなくなるといふけれども、自分で莖だと気づくことが正気なのであって、莖だと気づかなかつたら、これは狂気ですね。」

すると対話者も、「そうですね」と合槌を打ち、大団円を迎えている。

二十六年も前のことで、世の中も人間そのものも大いに変化を遂げていることは確かと思われるが…。何が言いたいかと言えば、小林理解という小径を歩むためには、まず、尊敬の念が大事、これを叫喚したいのだ。

ということで、小林の『私の人生観』からここを引用する。

「人間の深い認識では、考へる事と見る事が同じにならねばならぬ。さういう身心相応（＝原文通り）した認識に達する為には、又、身心相応した工夫を要する。さういふ工夫を観法と解してよからうと思われます。」

講演から起した文章である故か、明解に読者に届く。この少し先には同じ内容が、より具体化されて小林の「生きる流儀」（＝小林の表現）を鮮明に見る気がする。

「遂に視力といふものが、そのまま理論の力でもあり思想の力でもある、といふ自覚に到達しなければならぬ筈

のものである。」

ところが、小林を曲解という視線で捉える人は、過去には多かつたらしいのだ。その典型と覺しきところが、前述の対談のここだ。

「あれだけの大著の（小林の）宣長論の中に、（本居）宣長の思想の客観的な構造に対する説明もなければ、日本文学史の中に占める位置を論じている部分もない。それどころか、はじめから、そうした概念的方法を考へること自体が間違いで、（中略）自分はむしろそれを退けるんだというようなことを言っている（以下略）。」

誤解を避けるため確認しておくが、「客観的な構造」「文学史の中に占める位置」「概念的方法」等々は、極めて尊い視点であり、重要視されて当然だ。ところが一転、小林においては、人生をより良く生きるための諸々が、それよりさらに上位に意識される。これをまず、心におさめつつこの人の著作に接する必要がある。

では、それは何？　となり、「概念

的方法」を退けた人の「生きる流儀」とは？　となるが、それが『手帖』に出て来る。

「—かういふ奇妙な風景に接して、はじめて他人といふものが自分を映してくれる唯一の歪んでゐない鏡だと合点する。この作業は見た処、信じ難い様だが、少なくとも私にはほんたうの事であつた。」

これが偶然、発せられた文言ではないことは、或る雑誌が企画した、小林を囲む座談会、「歴史と文学」でも、一步、踏み込んでこう発言していることからわかる。

「—他人と云ふものが良く見えてくれば、他人は自分の鏡になるもので、本当に他人が良く見えて来ないうちは、他人は他人だと思つたり、それから、さういふ他人に對して、自分が色々、言慕らなくてはならぬ様な、さういふ不安があるんだ。」

とかく若い頃には、抽象的な思念、思想を絶対視して、それを心に抱くことが人間を作り上げて行くと信じ易

い。ところがいつの日か、小林を頼つて生きてみると、それとはまったくの別事が大事と思えて世界が一変する。

こんな仮想をしてみる。只今、或る種の不充足感を感じつつ日々を生きているとする。やがてその遠因を、幼少時の家族とのコミュニケーションの不足と突きとめたとする。しかし、さて、どんな手を打つべきか：この際の時の流れくらい、生きることの深刻さを身にしみて感じさせることは他にない。しかし、それが尊い経験として生きて、我が身を助ける瞬間はやつて来るから、人生は捨てたものではない。

「他人が良く見えて来ないうちは云々」と書いた人の胸の内を察知したと思へた時から、日々、テレビで見る父親、母親と幼児・子供の交歓のシーンが、この世の宝のように尊く見えて、先人の凄さに驚く。

己れの「視力」が「観法」へと昇華を遂げたか、とすら感じてしまふのはこんな時だ。

明智光秀の里で

高橋和島
(作家・郷土史家)



名古屋方面に向かうJR中央本線午後の便は普段あまり混まないのですが、晩春の週末のこの日は空席が少なく、吟行帰りの句会仲間四人が無事に座れたことを喜び合いました。

乗車駅は恵那、下車駅は中間に四駅、約三十分先の多治見。共に美濃(岐阜県)の駅です。ほどなく動き出した電車の車窓に目をやり、汗ばんだ首筋をハンカチで拭きながら、膝に載せた土産入りの紙袋を置き直しました。
(待てよ……。何か足りないぞ)
紙袋はいま恵那駅前の和菓子屋で買ってきた栗きんとんと栗羊羹が入っ

ており、切符を買う際財布を取り出したシヨルダーバッグもちゃんと肩に掛けたままです。

「あつ」

わたしは思わず大声を出してしまいました。

革鞆がないのです。

入っているのは歳時記と句作ノートそして筆記用具と電子辞書だけ。しかし、三十年以上使っている大事な愛用の鞆です。どこに置き忘れてきたのか覚えはありませんが、ともかく見当たらないのです。

わたしは顔色を変えて、句会仲間

自分の失態を明かしました。

「土産を買った菓子屋でも句会を開いた料理屋でも、思い当たる先に電話を試みたら……」と仲間のAさん。走行中の電車の中ですが、仲間もわたしも携帯電話を持っています。

「いや、電話では埒があかないもんですよ。次の駅で降りて、恵那まで引き返す方がいい」と言うのはBさん。大都市の乗り物と違い、地方の電車は本数が限られており、引き返すと言っても簡単ではありません。

迷うわたしの耳に「次の駅で降りて引き返す場合の恵那方面の電車の待ち

時間は二十分ほどですよ」という女性の声。斜め向かいの座席に座った四十代とおぼしき婦人が、これで調べたのよと言わんばかりに、携帯電話をひらひらさせています。見ず知らずの女性でしたが、大騒ぎしているわれわれを助けようとしてスマートフォンで時刻表を調べてくれたのです。

なんとも嬉しい助勢。好意を無駄にせず、わたしは途中下車し、恵那の駅へ引き返しました。むろん、この間、無為に過ごしたわけではなく、料理屋と菓子屋に電話をし、鞆の置き忘れはないかと訊ねました。

いずれの先も「ありません」——。恵那駅に着いたときのわたしは肩を落とし、悄然としていました。

駅員に切符を見せ、置き忘れをしたので引き返してきたと説明すると、それは何で、どんな形、色。中に入っているものは……と矢継ぎ早に訊く。かくかくの品ですと答えると、領いた駅員は奥に引っ込み、わたしの鞆を手に戻ってきたではありませんか。電車通

学の高校生から待合室の置き忘れ遺失物として届け出があったというのです。嬉しさのあまり駅員にハグしそうになったわたしは早速、心配しているはずの句会仲間に電話。喜んでくれた応答の中に「さすが光秀の里だね」というのがありました。

来年のNHK大河ドラマ「麒麟がくる」の主人公明智光秀の生誕地は諸説あり、美濃（岐阜県）の恵那市、可児市、大垣市もあげられています。明智の家紋桔梗は美濃源氏土岐氏の家紋であり、彼が土岐一族の流れを汲むことは間違いないので、わたしはこの三市のいずれかが生誕地だろうと思っています。

恵那で開かれた今回の吟行では当然、これが話題になり、光秀像をあれこれとやってきたばかりでした。そのせいで出てきた言葉のようでしたが、何が「さすが……」なのかは、言った本人にまだ確かめていません。NHK大河ドラマの影響力は大変なものですから、どの町も「光秀ゆかり

の地」の看板を下ろす気はなく、観光客目当ての土産物づくりも始まっています。例えば江戸時代の国学者塙己一著「続群書類従」の明智系図やら、「明智氏一族宮城家相伝系図」やらを持ち出して、わが町こそ生誕地と主張する大垣市は弁当、パン、生菓子の三品を、明智の名を冠した歴史ある町を擁する恵那市はうどんないう具合に、光秀にちなんだ土産物を開発し、売り出しています。

生誕地論争の軍配は歴史学者の偉い先生方におまかせし、今のわたしは無条件で恵那市に肩入れすることになっています。中山道美濃路の宿場だった面影を残す情趣ある町。日本百名山の一つ恵那山の緑と名水に恵まれ、老舗の店で食べた料理も三重丸だった町……。時刻表を調べてくれた婦人、鞆を届けてくれた高校生、わが事のよう一緒に喜んでくれた駅員——。なにもかもが「さすが光秀の里」だからです。